

# プロレタリア通信

No. 13  
1959.5.15.

改定の交渉は全て完了しアメリカの回転を持つのみならず、重志は行政協定に移っている。このよくななかでわれわれが危機を叫ばなければならぬとすれば、情勢が要求している斗争の全体的發展に、必ずかに学生運動とのそく全戦線が決定的に付違れ記しており、その学生運動も著しく不均等とも、でしか展開しないといふ事であり、この事実とくらはりに、労働者が投げきられていないことにある。

現実の斗争に対するこのよくな戦略的認識から、それは前回の名を獲つて史的力を失つた皆歎息する公論新義党曰本共産党から放逐し實にプロレタリア的前程の確立のための斗ひを開始したわれわれが、学生運動に与えた任務は、學生の全国斗争の爆発によつて、労働者の斗争に点火せよ！』であった。

この序針の下にわれわれは四・一五・二八迄して五・一五と斗いつづけて来て、その任務の一歩を遂行しえて来た。四・一五首相官邸下毛の地獄労働者へのアーピール、その結果としてからとられた四・二八北洋青年婦人労働者の統一行動、はじめての実力的抗議行動としての夜間提灯示モ。

そして今五月一日、才五回会談の一週年前に斗われたわれわれの全國的斗争、北洋の全體スト、東京の

同體を含む五〇〇〇の集会アモ、醉臥・愛知の授業放棄アト、そして國西ア、弘島・高知ア、力摶アの生は一齊に斗いに立ち、その力は下部労働者をふるい立たせ、一六日の行動も三三日は續いた總評幹部の再度の裏切りを許さないだつ。

だけれども、この斗いの組織の中で極めて多様な内情が見出され、それが戦線の不均等を表す、この日和見主義の斗争、そして底の争合に応じていることをわれわれは知らねばならないのだ。

斗いはいまさなかだ。斗いは五一・一五を終ったのである。けれども、われの斗いの苦心の課題は、済物的、学生のせ字派によると曰く、帝國主義アルジョアジーの背骨に痛打を一轟き加え、階級差別の主台をゆるげし、改定を阻止することをななければならぬ。

六、二五両側者・学生のゼネストを奮闘致せ給ひ。

改定交渉の進展と我方の闘い

法斗争にも比されてるべき勞働者大衆のニギヤハ念の想ひをもつて、では賭けられていろのである。

五一、一五の学生の斗争の決定的重要性がここにあつた。若しくして済物の如きの勝利と、ともかく、わらず決闘的の延遷は、いのちの状況は、學生の如きは、六月三五日ストを首裡に進むる前例の如きを隨體的、等の焼替へが屬生之絶えさせを紐解いて、二三の青年学生の、自信にてらる。

独立、中立日本」」のスローガンへ、そして「支那問題は支那問題」、實用段階には決然と唱えひのではなく、實証主義的、よく知つてもらひ易いとして、實力的阻止政策を否定する日獨尾主義と、非正規的に斗つした。

彼らは、学生運動論に於いても、学生自らのアーリニヨア意識論的定義から、あるいは学生の「アロレタリアの意識論定」（トロモギー、ドグマティスト）から無媒介的に展開する（前提そのものの誤り）のに拘らず、結果、労働民主化・労働条件改善・至る要本・労働争議等の「職業的」至清斗争を、政治斗争に対するより一層の「階級主義」へ指向したのである。

この一派を代表してくした所で、即ち北澤道、九大等、二東大、東大、早大、東工大、お茶大、東工大等々で四・五月斗子は、この三度連続して活動したのである。

その間には、「学生運動の動機」「いつに何をやるか」と語り、「階級斗争」と並んで「階級斗争の中心問題」を明らかにする事と強調しながら、この地区婦女会的「学生運動」に移しかえた事によつて、実質的に日知見主義に陥つてしている部分との辯争である。

反対斗争の中心より重要な、労働者階級の第一の課題が、は「明らかに激化して、その合理化攻勢を阻止し、景氣の上昇とどうぞ大巾賃上げをめぐる第一」「あり、在原斗争は「ア

を物質的力に実現するのをひとつの指導部隊の在る決定的重要性がある。

運動と政治方針を媒介する指導的勝敗の転換であり、その指導理論の転換なのである。具体的に「過去一年間の実践的理論的斗争を至てから」としたスター・リン主義から「眞」アーロンタリヤ的視点を回復して、その下に二つほどよりも深い、即ち「区別された全階級斗争の展開」立った学生運動の方針を確立し得たに至つたことである。「転換」の大衆化を叫ぶとすれば、それが「この確立やれた政治方針は圧倒的的學生を結集した大暴行動として實行してゆく事以外にあり得ない」己。「転換」の大衆化は、専門的理論的初の強化や、討論集会、クラス討論等でのイデオロギー斗争に代へられるもので、決してむしろのであつて、ましてやスター・リン主義が、の被別を学生一人一人に渗透せしむる事（そんじ事）不可能（）、したがつて転換の大衆化とはととする事はナンセンスの極みだ。

そして我々の「眞」にアーロンドニア的視點から作りあげられた方針の下、才媛による大衆演説の中で、量的に生み出された革命的、共産主義的學生を討論、研究会等々のハイドロロギー活動を通じて徹底的に我々の思想と武装し組織的に定着させるへ同盟、あるいは社學同窓等々によつて我々の轉換を確固く切るものにしてゐる。

次に、最初運動の中心課題は何かという異からみても、合理化斗争のへ安堵斗争に対する形での強調は決して正しくはない。労争戦線の起飛的状況について、アーロンドニアに明らかにしてゐれば、決して「合理化」を解説せざる本體ではない。我々危機に突破口を用ひるために、幹部の裏切りなどクロホ、レザーブ等の方針がヨシと勝利「導く」たが問題する具体的斗争の中で大衆の意識を明らかにする」とであり、そのためにひおひきの斗争の実績をねばならない。現在の危機的状況を一段階合理化していくのは、何事がないことにある。安堵斗争もその有効な手段の一つだ。たゞそれが「左翼の不滿をカバーするスクリーン」として總務部によ

もつと重要なのは「合理化反対」だ」といふ。安藤大尉に対する否定的な感情を介して、「学生運動の転換の大衆化」を云ひながら、その転換を、転換の下にかねてられた方針による学生大衆の組織、具体的又力闘争の在り方の展開によつて現実的力にするのではなくて、主体的条件を云々する事によつて、明確な行動方針の提起は避けたのである。例えば東京における4・28斗争の「首相脅脛問題」「一級効率会合モ」か、5・15斗争に於ける行動方針の不明確さ。等々。だが論議の過程の中で明確にされたように、(一)の七つに結論の提起の仕方そのものから誤つてゐるのである。

第一に、労働者階級の斗争に於ける合理化斗争の特徴を、黒澤が約に学生運動の方針を繰びつけて出でさせている。労働者斗争としての合理化反対斗争の強調の正当性はともかくとしても、(一)の次に触れる)学生運動の中心課題としての労働者階級の費用削減と、一の合理化斗争との間に如何にして時代的相関關係がござるのなどという問題はいつこうに明りみで示されてゐる。

学生運動を結束する前段としての我々の立場は、「年譜にやつてもしょがね」といふところから、「合理化反対斗争が力だだ」と云ふことではなくて、中国式の運動としての学生運動が發揮する安保改定阻止の政治運動をいかにして、主導権を取らんすく、労働者の討議と有利に発展させる方向で利用し繰びつけるか、にあるのだ。労働者階級の討議は全ての斗争の中核である。だが、だからといって他の中國式の政治運動は不要なのではない。これが「斗争」は、もし全討議のつかみの上に立つて指導する前段によつて組織されるなら、全討議の中で正しい位置づけられ、労働者の討議を前進せしめる力と貢献得るのであり、だからこそ、大産主義者はあらゆる所で政治斗争を組織化するのだ。

